

冬の祭りのぬくもり

十日町には、冬に行われる伝統的な祭りや行事がたくさんある。豪雪地帯である十日町は、農業から食生活、工芸品に至るまで、その文化のほとんどすべての面で雪に支えられている。十日町の冬祭りは、雪が生命を育むことを祝い、地域が一体となる重要な機会となっている。雪国での暮らしを支える友情と協力の絆を強めるのだ。

十日町の冬のイベントをいくつかご紹介しよう：

十日町雪まつり

2月中旬に十日町市内の会場で開催される人気イベントだ。市民が作る大雪像のほか、アート作品やパフォーマンス、花火大会などが行われる。現代的な冬の風物詩である「十日町雪まつり」は、昭和天皇（1901～1989）が「冬を楽しみ、雪の美しさに親しむ祭りを作ろう」と提唱し、1950年に始まったものだ。

婿投げとスミ塗り

これらのユニークな行事は、松之山温泉街の正月行事の一部である。1月15日、前年に結婚した男性たちが、丘の上の神社から5メートルほど下の雪だまりに文字通り投げ落とされる。もともとは、松之山の娘を“奪い取った”仕返しに、住民が村外の花婿を放り投げる儀式だった。現在では、地元の花婿なら誰でも受けることができる。その後、1年分のお守りを薪の上で燃やす行事が行われる。参加者は焚き火の煤を手に取り、雪と混ぜてお互いの顔にこすりつける。煤は縁起物とされており、多ければ多いほど良いとされ、その乱戦は一風変わった絆を深める体験となる。

大白倉バイトウ

約300年前から、大白倉の農村では1月14日に集まって「バイトウ」と呼ばれる円錐形の小屋を建ててきた。高さ10メートル、直径8メートルほどで、ケヤキとワラで作られている。夕方になると、住民たちは小屋の中に集まり、食べたり、飲んだり、伝統的な歌を歌ったりして、地域の絆を祝い、その年の健康と豊作を祈る。午後9時頃になると、全員が外に出て小屋に火をつけ、高さ約30メートルものたき火を起こす。その炎の形は、その年の農作物の収穫を占うと言われている。

「鳥追い」と「ホンヤラドウ」

雪国の多くの町では、1月14日の夜に「鳥追い」という冬の行事が行われる。多くの冬祭りと同様、この風習も農業に関係している。子供たちが町を練り歩き、大きな声で積み木を打ち鳴らし、歌を歌って、その年の農作物を食い荒らす悪い鳥を追い払う。大人はその子供たちに餅やお菓子を与える。子供たちはそのお菓子を食べながら、「ホンヤラドウ」と呼ばれる特設の雪小屋で夜遅くまで遊ぶ。